

報告),工業開発評議会刊行資料,諸会議資料(専門家作業部会,研究会およびセミナー)の順に記されている。だ

が大部分は会議資料である。

(第3章以下次号)

(いしかわ・こうじ:一般参考課国連・官庁資料室主査)

レファレンス事例 2

経済学研究のためのガイド・ブックを紹介して下さい。(個人)

[回答]

ご依頼の意図がはっきりしませんので,簡単な解題を付して紹介しておきました。戦後刊行されたものを刊年順にあげてあります。

経済学研究の葉<合本> 一橋大学新聞部編
春秋社 昭28 1179p (330.36-H587k)

昭和10年,昭和15年に続き,昭和24年に全面改訂されて刊行されたものの合本。この種のものの先駆的存在で,戦前,戦後を通じて,もっとも頻繁に利用された。内容は経済学説史編,経済政策編,西洋経済史編,東洋経済史編の四部からなる。叙述はまず,理論の要点を概説し,その項目ごとに関係文献を例示して解説するという形式をとっている。執筆は一橋大学の教授陣。刊行は古くなったが,古典的資料の解説書としては,今もなお有用。各編の巻末についている人名索引は詳細で,それぞれの代表的な著作への手がかりとなる。姉妹編に「商学研究の葉」がある。

経済学の学び方 山田雄三等編 白桃書房
昭33 384p (330.7-Y227k)

上掲書よりはハンディ。ただし,対象は入門の段階を一応終えた人。内容は第一部経済学派の解説,第二部基本的諸テーマごとの解説,第三部長老経済学者の研究体験からなる。叙述はいたずらに文献名を羅列

することを避け,文献の選び方,読み方を示すことを心がけている。執筆は主として一橋大学の教授陣による。第一部の「経済学の入門文献」では,辞典,文献目録等の二次文献の紹介のほか,今後の研究過程で利用すべき外国の専門雑誌の解説も行なっている。

体系経済学重要文献案内 永田正臣編
昭34 352p (330.31-N223k)

初学者向き。内容は経済原論編,西洋経済史編,日本経済史編,財政学編,経営学・会計学編からなる。叙述はもっとも代表的な古典的文献にしぼり,その文献の内容を概説する形式をとっている。

経済学学習はんどぶく 日本評論新社編刊
昭38 358p (331-N684k2)

初学者向き。「経済セミナー」に掲載されたものをもとに加筆,編集したもの。内容は第一部経済学はどういう学問か,第二部各分野ごとの学習法,第三部経済学学習プラン,第四部経済学基本文献案内からなる。主題は狭義の経済学のほか,財政・金融,社会政策,統計学,経営学,会計学をカバーしている。執筆はトップクラスの経済学者による。

近代経済学研究入門 宮崎義一編 有斐閣
昭40 260p (331.39-M672k2)

「初学者への手引きを目的としている」とはしがきにあるが,かなり高度なもの。内容は第一部近代経済学を学ぶために(学説史)第二部近代経済学の理論構造(経済政策,財政・金融も含めて)第三部最近の経

済問題（現代資本主義論等）からなる。各章は一般的なもの（初学者向き）→各論的なもの（専門的）→さらに進んだ問題（特殊問題）という順序、さらに各節の中は〈イントロダクション〉→〈基本文献解題〉→〈さらに進んだ研究のために〉という構成で叙述されている。執筆者は中堅の経済学者八人だが、上述の原則を厳守して、統一のとれたものになっている。巻末に文献索引30pがついている。

マルクス経済学研究入門 杉本俊朗編 有斐閣 昭40 275 p (331.34—Su732m)

編集の意図は、洪水のように書かれているマルクス経済学に関する書物を整理して、マルクス経済学の輪郭と研究状況をまとめてみることにしている。対象は入門終了者。内容は、第一部ではマルクス経済学の基本的原理の論点の整理と内外研究動向を紹介し、第二部では「資本論」以後のマルクス経済学が新たに対象とする「帝国主義」ないし「現代資本主義」を扱っている。執筆は中堅ないしは若手の経済学者。マル経ではこの種の類書は少ない。巻末に「マルクス経済学研究文献目録」16pがついている。

経済学研究入門 鈴木鴻一郎編 東京大学出版会 昭42 308 p (330.7—Su839 k)

対象は経済学専攻の学生。東大経済学部教養過程の基礎六科目（経済学原理、近代経済学、経済史、統計学、経営学、会計学）の研究対象、研究課題、研究方法を担当の教授が執筆したもの。執筆者により必ずしも文献紹介に力点はない。

経済学のすすめ 伊東光晴、佐藤金三郎 筑摩書房 昭43 255 p (330.7—I 819 k)

初めて経済学を学ぶ人を対象としたNHKの放送「政治経済学のすすめ」がもとに

なっている。「付録1 経済学を学ぶために」で、和・洋20冊余りの優れた著作を対談形式でたくみに解説している。

経済学入門書の手引 日本経済新聞社編刊

昭45 215 p (DA1—37)

日本経済新聞文化欄に連載した「入門書のしるべ」から社会科学関係の項目を選び一冊にまとめたもの。経済学、経営学の重要テーマを主体に、その関連領域をかなり広くカバーしている。各項目はコラムの枠に対応して、見開き二頁にまとめられている。どちらかというと社会人向き。執筆者は各項目ごとに異なっている。

経済学・経営学を学ぶために 関東学院大学経済学会編 新評論 昭45 312p

(DA1—49)

表題のほか、会計および関連科目をカバーしている。対象は学生。執筆者は同大学教授陣。各主題の論点を解説し、その項目ごとに基本書、入門書、専門書等に分けて文献を収録している。

経済学研究のために 神戸大学経済経営学会編刊 昭45 273 p (DA1—63)

最近の研究動向に焦点があり、「経済学研究の葉」を補充する役割を果たす。たとえば、経済原論の編ではケインズ以後に力点があり、また、経済体制論といった項目が設けられているし、経済史の編では New economic history に一節がさかれているといった具合である。そのほか、金融・財政、経済・社会政策、国際経済、各国経済、海事経済、統計をカバーしている。対象は、学生だけでなく、項目によっては社会人にも有用。姉妹編に、同様、「経営学・会計学・商学研究のために」がある。執筆は同会所属の学者陣による。

(以下62頁へつづく)

(59頁からつづく)

戦後日本経済研究の成果と展望 上・下
エコノミスト編集部編 毎日新聞社 昭45
2冊 (DC55—32)

研究対象が一応、日本経済に限られているが、今日までのわが国経済学の実証分析の過程と水準を把握する上で欠かせない。テーマごとに、それぞれの分野で画期的な役割を果たした文献を追う形で論述している。上が近代経済学編で、下はマルクス経済学編。執筆は中堅学者とエコノミストによる。

経済学
現代経営学研究の基礎 粟屋義純等編 白桃
会計学
書房 昭46 347p (DA1—73)

どちらかというところ一般人向き。経営学、会計学を学ぼうとする人に、それとの関連で経済学も一応の知識をとという観点から編集されている。第一編経済学の基礎、第二編経営学の基礎、第三編会計学の基礎からなる。各編の最後に一括して文献を紹介している。巻末に事項索引がついている。執筆は亜細亜大学の教授陣による。

経済学ガイドブック 増田四郎等編 東洋経
済新報社 昭46 768p (D2—145)

初学者のみならず、研究者にも、さらには図書館のレファレンスブックとして、もっともよく利用されるだろう。というのは、従来、この種のものが学説中心であるのにたいして時事的な経済問題を冒頭に据えている。すなわち第一部現代の経済問題では物価に始まり、住宅、交通・運輸、公害、エネルギー、社会保障・医療保障、情報産業、流通革命、企業の合併・合同と続き、さらには円問題も登場するといった具合である。第二部経済理論でも各論に力点がある。第三部経済の歴史では、ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、中国、インド・西アジア、日本の国別のほか、産業革命、帝国主義等のテーマ別にも扱っている。叙述の構成は(1)解説、(2)基本文献解題、(3)参考文献目録という形式をとっている。執筆は一橋大学の人達を中心に50人余り。なお、付録として内外の主要な辞典、雑誌を収録している。巻末の人名索引は詳細で、「経済学研究の栞」同様、それぞれの代表的著作への手がかりを与えるものである。